

今回の部報は、保健体育科指導員の鈴木善博先生、波江野寛之先生に、今年度の指導員訪問の総括と来年度に向けての重要点について書いていただきました。

岡崎市立三島小学校 鈴木 善博

1 指導員訪問を振り返って

新学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた授業が、多くの学校で実践された。「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、指導方法の工夫により必要な知識及び技能の習得を図りながら、子供たちの思考を深める発言を促したり、気付いていない視点を提示したりすることによって学習を展開することが大切である。

(1) 主体的な学びにつなげる学習課題

主体的な学びのために大切なのは、学習課題を自分事として捉えていることである。また、本時の目指す姿が明確であり、学習の見通しをもつことも必要である。

A中学校のB教諭は、2年生の球技（アルティメット）の実践を行った。前時の学習でうまくできなかったことを出し合う場を設け、出た意見から本時でできるようにしたいことを引き出し、学習課題を提示した。さらに、課題解決の見通しをもてるようにするために、各グループで考えた方法を全体に紹介した。このように目指す姿を整理したことで、子供は、ゲームを終えるごとに作戦ボードを使って動きを確認したりアドバイスを合ったりして、主体的に学びを進めることができた。

(2) 仲間とともに進める課題解決 ～「分かる」と「できる」をつなげる支援～

仲間とともに課題解決を進める過程には、「課題に気付く」「核心に迫った気付きを全体に広げ、共有する」段階がある。この過程において協働的な学習をすることで学びは深まり、「分かる」が「できる」となって技能を高めることができる。

C小学校のD教諭は、4年生の球技（オリジナル教材：パスゲットゴール）の実践を行った。ゲーム前に課題の「シュートまで速くいけるパスのつなぎ方」について予想を立て、予想が合っているかどうか考えながらゲームを行った。そして、ゲーム後に気付いた点を出し合い、D教諭は、子供の気付きからキーワードを整理し、「素早く遠くにつなぐ」とまとめた。このようにして、子供はマークされる前に遠くのスペースにいる仲間にパスすることを理解し、動きを改善できた。

2 来年度に向けて

よい体育の授業とは、「思い切り体を動かすことができる」「友達と学び合うことができる」「新しいことに気付くことができる」「技能を高めることができる」授業であると考えられる。そこで、子供自身が課題を見つけ、その解決に向けて「主体的・対話的」に活動する授業を目指す。このことの実現に向け、運動が得意な子供も苦手な子供も、積極的に学び合いに参加できるようになる方法を明確に示す。そして、どの子供も、たくさんの「できる」喜びを味わえるようにしていきたい。

1 指導員訪問を振り返って

多くの学校の授業実践から、体育・保健体育科の授業における運動量の確保と、子供の発達の段階に見合った運動実践ができるような教材研究を行い、体育の授業の充実を図ることが重要であると改めて感じた。体育・保健体育科の学習の中で、子供がうまくなる運動のこつをつかむことがとても重要である。ペアやグループ活動において、友達と協力し運動のこつを確認しながら何度も繰り返すことで、できなかった運動ができるようになり、授業を楽しく感じ、運動に夢中になっていく。このような子供が体の動かし方やうまくなるためのこつを理解できる場面、問題解決を促す思考・判断の場面を取り入れた運動やスポーツの技能の向上が図られる授業づくりが大切である。

(1) 子供が夢中になって運動しているうちに技能が高まる授業

A小学校のB教諭は、1年生の投の運動遊びの実践を行った。友達と楽しんで何度も投げる経験を積むために、いろいろな種類の練習の場を設けた。それを見ただけで、子供の気持ちが高まっていることを感じた。子供がいろいろな練習場所で投げる動作を楽しく繰り返す中で、効果的な投げ方に気付いたり、自分なりに根拠をもって練習方法を選んだりする姿が見られた。目を輝かせながら、夢中になって投の運動遊びをする中で、子供は自然とスムーズな腕振りや身を付けることができるようになった。低学年においては、夢中になって楽しく運動していくうちに、工夫する力、創造する力、やり遂げる力、コミュニケーション能力などさまざまな力を獲得するための場の設定や教具の工夫が大変大切である。

(2) 主体的・対話的で深い学びの授業づくり

体育・保健体育科の学習では、他教科と比べ、自己の学習の課題が自他ともに視覚的に把握しやすい特性がある。友達の様子を見て比べる、ICT機器を使って自分の技の出来栄を見る、記録を比べるなど自己の学習の成果を実感する方法が多様にある。それゆえ、振り返る際に何をもって成果を実感するかが授業づくりの重要な視点となる。

E中学校のF教諭は、2年生の跳び箱運動の実践を行った。子供は、首はね跳びの技能は難しいと考えたため、グループに分かれてまずは台上前転がよりきれいにできるような技能分析を行った。ロイター板の使い方、手の着き方などに気付き、「どうすればできるのか」を解決する見通しを立てた。また、F教諭は、学習の様子をiPadで記録し、形成的評価に生かした。映像を基に子供の姿を認め、価値付け、子供からの問いの解決のサポートを行うことで、一人一人が自己の課題を解決しようと学び続ける姿が見られた。子供が視覚的に捉えた自分の姿を整理し練習へとつなげることや、自分の取組を振り返る（メタ認知）ことを繰り返すと、子供は学びに向かう力を高めることができる。

2 来年度に向けて

授業づくりで大切なのが教材化と場の設定である。既成のボール運動（バレーボール、サッカーなど）をそのまま教材としていないか、器械運動などで技能に応じた多様な場の設定がされているかなどだ。単元の始めは、どの子供も興味をもって取り組むかもしれないが、そのうち技能面に優れた一部の子供だけが活躍し、見ているだけで体を動かす機会がない子供が増える授業となっている光景を目にすることがある。教師が授業づくりの基本として考えてほしいことは、それぞれの子供のもっている技能に応じ、活躍する場所が約束された教材を考えることや多様な場で活動できる保証をすることである。